

夢 塾 だ よ り

～ 弁 当 の 力 ～

(第78号) 令和6年1月29日

私が高校教師になったのは36歳。すでに妻は中学校の教師をしていました。中学校には給食がありますが、高校に給食はありません。妻は私の弁当を毎朝作って持たせていました。そんな日々が続きましたが、私の弁当を作るのに時間がとられて、自身の朝食をとる時間がないまま出勤していました。そんな妻を見かねた私は、自分の弁当は自分で作ることを思い立ったのが始まりでした。



以来、弁当作りは私の得意分野になりました。高校のクラス担任になった年は、クラスの生徒の誕生日をチェックして、朝のホームルームの時間に誕生日の生徒に私が作った弁当をプレゼントするということを続けました。(学級担任になった年は計6回)

私には3人の子供がいますが、子供たちが高校生になってからの弁当も、妻と私でほぼ交互に作って持たせました。いわゆる「買い弁」をさせたことはありませんでした。

どこの高校でもお昼時、弁当業者が校内に入れる学校では、昼休みの鐘が鳴ると、一目散に走って弁当を求めに行く光景があります。弁当持参の生徒は、ゆったりとして弁当を食べるのに、買い弁の生徒は昼飯を調達しないといけないので必死でした。

校長をさせていただいた学校では入学式やPTA総会等、親御さんに挨拶する場面では、必ずお願いしました。「手作りのお弁当を持たせてください」と。

高校の3年間、親が作る弁当を食べて育った生徒は、その後、大学や社会に出るわけですが、「弁当」というこれ以上ない愛情の素を体に入れて成長するので、まがった道に入ることはありません。入りそうな直前でその力が阻止します。それが「弁当の力」です。・・・こんなことを熱く語ったことを思い出しています。